

バリの風土と家系についての考察（II）

森 宗 平
松 原 正 道

はじめに

前稿に続き、「バリの風土と家系についての考察」のタイトルによる本研究ノートは、プリ・アニャールの当主オカ・シラグナダ氏より提供された、“History of the Royal Family of Puri Anyar Kerambitan 1675–1994”を訳出したものが中心となった記述である。

それによると、オカ家の始祖にあたるタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデこと、チョコルダ・グデ・バンジャールは、タバナン王家より出て、各地を放浪の末クランビタンへ来て、一家を構え、クランビタン家を創設。

そのクランビタン家から分家した形のタブ・パクルン・シラ・アリヤ・マデ・ダンギンによって興されたプリ・アニャールこそ、オカ氏の家系とすることになる。

こうした背景を眺めることにより、プリ・アニャールおよびオカ家の全体像が把握されるので、本稿の目的はそこにあるのである。

1. 伝説的時代

伝説的存在であるブタラ・アリヤ・カンチャン Betara（神になった人の意）Arya Kencens には4人の子供がおり、第1子は Pw Raka, 第2子の Dw Made（長じて、スリ・マガダ・ナタ Sri Magada Nata）はタバナン Tabanan の初代の王となり、現在のタバナン市から5キロメートル離れたクボン・ティング Kebon Tingguh に宮殿を建設（現在は、寺院と聖なる泉を残すのみ）した。

第3子、キヤイ・テッグ Kiyai Tegeh は長じてキヤイ・テッグ・コーリ Kiyai Tegeh Koli と称し、初代バドゥン Badung（現在の州都デンパサル Denpasar 市を含む周辺の地域）王となる。



写真1 タバナン王家の一族

第4子は女子で、カバル村のキヤイ・アサク Kiyai Asak に嫁すが、詳細は不明。

初代タバナン王スリ・マガダ・ナタには8人の子供がおり、第1子シ・アリヤ・ヌグラ・ラングアン Si Arya Ngurah Languan の時に、現在のタバナン王宮の地に宮殿を建て（もっとも、王宮はその後の戦火で焼失、現在のそれは再建されたものであり、宮廷そのものがなくなった今日、王の子孫は王宮のそばの小さな家に住んでいる）宮廷を持つ。

そして、8番目の子供であるキヤイ・クトウ・バンドウサ Kiyai Kutuk (Kt.) Bandesa あるいはブンチャンガン Puncengan またはキヤイ・クトウ・ノトル・ワニラ Kiyai Kutuk Notor Wanira は賢い子供であり、人望もあったので人々は彼に期待を寄せた。

ある日、彼が寝ていると、突然、光が指し、空のような所へ行けと言う声が聞こえた。そこで、彼は、キンタマーニ Kintamani のウルン・ダヌ寺院 Pura Ulun Danu へ行き、神から力を得るとともに、自らの土地へ行けとのお告げを受けた。その土地は黒いと言う意味を持っており、その言葉から転じてバドゥン Badung となり、彼は、そこへやってきた。

そこには、叔父であるキヤイ・トゥグ・コーリが王としていたが、彼は身体が弱っており、回復する気配がなかった。それにひきかえ、神から力を与えられているキヤイ・ノトル・ワニラはますます力を得て、叔父が死んだ後バドゥンの王となった。

ワニラ Wanira という名は、彼が若い頃、神聖な木 Waniyan Tree を、神聖と言うことで、人々が近ずかなかつたため、雑草などがはえるにまかされており、大変危険な状態にあ

ったのを、彼が枝をはらい、周囲をきれいにしたと言うことで Waniyan Tree を切ったと言う意味でつけられたものである。

一方では、勇気ある者と言われながらも、乱暴者と言う意味もある。

バドゥン地方には、バリ島の他の地方では話さない乱暴な言葉ニラ Nira を使うとされ、彼の行為と結びつけられている。

因みに、チチアン Tititiang (最良)、チアン Tiang (良) と三種類の言葉の使い分けがあるとされている。

その後、タバナン13代目の王には高位の妻 (パドミ Padmi, プラミ Perami とも言う) に子供が出来ず、王は、地位の低い妻の子供でも王位につけると言う約束をした。間もなく、低位の妻 (プナウィン Pendawing) に子供が出来、続いて、高位の妻にも子供が出来てしまった。

だが、王は、既に、約束をしていると言うことで、先に生まれている低位の妻の子供を王位につけ、彼は、チョコルダ・スカル Cokorda Sekar となる。

一方、高位の妻の子シ・ラリア・ヌグラ・グデ Si Rarya Nugrah Gude は、各地を遍歴、バリの北部シンガラジャ Singaraja を経て、1660年頃、クランビタン Kerambitan へやって来て、そこに住み、プリ・グデを建設、イダ・チョコルダ・グデ・バンジャール Ida Cokorda Gude Banjar よ呼ばれた。

以上の話は、松原が、プリ・アニャールの9代目当主であるオカ・シラグナダ Oka Siragunadha



写真2 プリ・グデ



写真3 プリ・グデ

氏から聴取したものだが、ギアツ博士夫妻も同様の話をその著書に記しているが、その情報提供者が誰であるかは明らかにはされていない。

ギアツ博士夫妻は、クランビタン家について、「もう一つの説明によると、タバナンの王が結婚後何年もパドミとの間に子供ができず、とうとう次に生まれた息子を、平民の妻の子であっても王位につけるというおごそかな誓いをたてた。するとすぐ平民の妻に息子が生まれた。しかしその後数年してたまたまパドミも息子を生んだ。王は誓いを守り、高位の息子は大きくなると王宮から外に出された。彼はジャワを目指したが、あるブラフマナ祭司がそれを思いとどまらせた。こうして彼は当時誰も住んでいなかったクランビタンの地に落ち着くことになったという」(Hildred Geetz and Clifford Geetz, *Kinship in Bali*, Chicago, 1975 鏡味治也・吉田禎吾訳『バリの親族体系』みすず書房 1989 158～159頁)と記している。

そして、もう一つ、「一つは現在のクランビタン家の領主によって語られたもので、それによるとタバナンとバドゥンとクランビタンの三人の王は異母兄弟であったという。そのうちクランビタンの王が最年少だったが母がパドミのため地位は最も高く、それに対して他の二人の王は地位の低い貴族に過ぎなかった。タバナンの王位を継ぐものとされていたのは最年少の彼だったが、彼は活動家であるよりも狩りの旅に出る方が好きだった。彼は地位の低い年上の兄たちを王宮に残して国中を回り、多くの人が説得したにもかかわらず、責任をとるのがいやだという理由で、家に帰って支配者につこうとはしなかった。結果彼は現在の場所

に小さな領地を得たが、それは“そこがあまりに美しい所だったから”であった。兄のうち一人は家を出て現在のデンパサールの近くにバドゥン王国を作った。こうしてクランビタンの領主はタバナンとバドゥンの現在の王よりももともと高い地位にあったと主張するわけだが、1906年の時点ではその二つの王国ともクランビタン家よりはるかに強大だった」(同上訳書 158頁)と記しているのだが、その情報提供者が、クランビタンの領主であると言っているが、詳細については分からない。

そして、後者の話をオカ氏にしたところ、氏は、この話を否定し、ギアツ博士夫妻の前者の話につながる上記の話を強調するのであった。そして、それは、後述するタバナンの王族の歴史に依拠していると言える。

ギアツ博士夫妻がタバナン地方(県)で調査をしたのは、1957年8月から12月にかけて(同上訳書 序文)であるので、1931年生まれのオカ氏は、25・6才になっていたので、夫妻に直接会っていないまでも、夫妻のことを知っていても良さそうなのだが、同氏からは、ギアツ博士夫妻の話を聞いたことはない。

以下、クランビタン家、特に、プリ・アニャールの歴代当主に関する記述についてはオカ氏より提供された、“History of the Royal Family Puri Anyar Kerambitan 1675-1994”によるものである。

そして、それは、タバナン王国の王族の歴史である“Babad Kearyan Tabanan (タバナン年代記)”に書かれているものに依拠しているのである。



写真4 プリ・グデの当主〈右〉と
プリアニャールの当主オカ・シラグナダ氏

以下、オカ氏より提供された資料に基づき、タバナン王国、クランビタン、特に、オカ家の家系であるプリ・アニャールについての記述を進める。

2. プリアニャール家の歴史

タバナン王国の13代目の王は息子がいないまま年老いて行った。王は、それを悲しみ、ある日、彼の妻達のうちの誰でもが男の子を得たならば、その子を世継ぎとし、王位につかせると言うことを約束した。やがて、スカル村出身の低いカースト（プナウイン Pendawing）の妻が妊娠し、男の子を生んだ。そして、彼は、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・スカル Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Seker と呼ばれた。

しかし、それから数年後、王族の妻（プラミ Perami）が、同じように妊娠し、男の子を生み、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデ Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Gede と呼ばれる。

今や、タバナン王国には、二人の息子がいることになったのだが、それとは裏腹に、王は悲しみに満ち溢れていた。だが、彼は、賢い王としての勤めを果さなければならなかった。そして、先の約束通り、低いカーストの妻の子であるタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・スカルに王位継承の約束をした。

そこで、高位の妻の息子であるタブ・パクルン・シラ・ヌグラ・グデは王宮を出て行った。彼には、多くの忠実な家臣達と兵士がつき従い、バリの島の北へ向って旅立って行った。やがて、彼らは、今日ではシンガラジャ Singaraja と言われているバンジャール・ブルルン Banjar Beleleng にたどりついた。そこには、大変徳の高い僧侶がおり、見ず知らずの少年に声をかけ、自らの屋敷に招き入れた。高僧は、少年が誰で、何処から来たかを知っていたのである。

高僧は、少年、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデに、ここには、彼自身の玉座はないが、バリの島の南部にはそれがあり、そこには、地面から煙が上がっているのをそれを目指して行くようにと話してくれた。

そこで、少年は、島の南西へ向って出かけ、見知らぬ土地へ着いた。そこに、素晴らしい（Rawit）眺めを見ることが出来、高僧の言っていた煙がたなびく土地であったのである。

そこで、彼は、ここに宮殿を建てた。Rawit の発音は Rawitan となり、やがて、Kerawitan となり、Kerambitan となった。

タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデは、チョコルダ・グデ・バンジャール Cokorda Gede Banjar と呼ばれ、王位に即いた。その名前は、彼が、以前、島の北部のバンジャール村で、高僧からの示唆を受けてこの地へやって来たことに由来しているのである。

最初のクランビタンの王となったタブ・パクルン・チョコルダ・グデ・バンジャールには



写真5 クランピタン風景



写真6 プリ・アニャール

二人の息子が生まれた。タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデ・スリンシン Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Gede Selingsing とタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・ダンギン Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Made Dangin である。

ここでも、タバナン王家と同様、宮殿に二人の王子がいるわけにはゆかないと言うことで、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・マデ・ダンギンは成長すると、プリ・アグン・クランビタン Puri Agung Kerambitan から出て、新しい所に移り、そこに宮殿を建てた。それは16世紀か、1675年の頃である。

新しい宮殿はプリ・アニャール・クランビタン Puri Anyar Kerambitan と呼ばれる。Anyar とは新しいと言う意味である。

そして、彼は、プマドゥ・アングルラー・クランビタン Pemade Anglurah Kerambitan 1世となる。即ち、現在のオカ・シラグナダ氏につながるプリ・アニャールの初代当主（王）となったのである。

彼の兄弟のタブ・パクルン・シラ・ヌグラ・グデ・スリンシンは、アングルラー・クランビタン 2世として、プリ・アグン・クランビタンで王位につき、チョコルダ・スリンシン Cokorda Selingsing となった。

プマドゥ・アングルラー・クランビタン 1世となったタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・ダンギンは、ブルンバン Blumbang 村、トゥガル・タム Tegal Tamu 村、パスット pasut 村、ムリリン Meliling 村、ムンドゥク・カトゥ Munduk Catu, サムサム Samsam, ティング・アグン Ting Agung 等の地域に広大な土地と田圃を持っていた。そして、沢山の武装をした家臣、例えば、宮殿の内側に200名と外側に200名と言うように、彼に仕えていたのである。

彼の王宮（宮廷）には、黄金と幾種類もの宝石で飾られた一対の聖なるクリス（剣）があり、それは、プリ・アニャール・クランビタンの神聖な場所に置かれ、今日に至るまで、大事に保管されている。

彼は、7人の子供を持ち、世継ぎとして、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・トゥカ Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Made Teka がなった。即ち、プマドゥ・アングルラー・クランビタン 2世である。

タブ・パクルン・シラ・ヌグラ・マデ・トゥカは、クランビタンとその周辺地域の領民との間に大変親密な関係を持っていた。そして、それは、彼の生涯にわたって見られ、特に、領民と共に田圃を見回りに行った時などに顕著に見られた。

ある日、彼は、稲の収穫のために田圃へ降りて行った。その時、彼は、超能力を持つ槍を携えていたのだが、そこへ、ベルクク Berkek と呼ばれる一羽の鳥が飛んで来た。すると、槍の先端から突然光が発し、その光を浴びた鳥は、焼け死んでしまった。

その時以後、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・トゥカは、その超能力を持った槍に焼かれた鳥の名前をつけ、それは、キベルクク Kiberkeke と呼ばれ、今日まで、プリ・アニャールに伝えられている。

そして、彼は、動物を愛し、特別な関心を示していた。また、彼は、沢山の動物を所有し、中でも、特に、白い馬を可愛がっていた。ところが、不幸にも、そのうまは、宮殿の近くのクク村を流れているイエ・アベ Yeh Abe 川で溺れてしまった。それ故、その川は、今日、神聖な川と言われ、時に、川の面に白い馬の姿が現われるのである。

今日まで、大切に保管されているキベルクの槍は、プリ・



写真7 槍を持つオカ・シラグナダ氏

アニャールにおいて、特に重要な儀式の時に取り出されて、先祖が安置されている場所の近くに鎮座するのである。

プリ・アニャール・クランビタンの2代目だったタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・トゥカは、1680年から1740年の60年間統治をしたが、彼には、二人の息子と一人の娘がいた。息子のうちの一人はタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・グデ Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Made Gede と呼ばれ、世継ぎとなった。

そして、もう一人の息子のタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・ニョマン Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Nyoman は、プリ・アニャール・クランビタンのサレン・タマン Saren Taman に住んでいた。

一人娘 (名前不詳) は、プリ・アグン・クランビタン出身のタブ・パクルン・チョコルダ・グデ・パンダック Tabe Pakulun Cokorda Gede Pandak と結婚した。

プマドゥ・アングラー・クランビタン Pemade Anglurah Kerambitan 3 世について。

彼は、大変に高いカリスマ性を持っており、人々に尊敬され、宗教上の聖者として、神秘性の持ち主であった。そして、如何なる時でも、あらゆる寺院や神聖な場所へ出かけて行き、常に、祈る人であった。

そして、彼は、プリ・アニャール・クランビタンの富が増し、更に繁栄することを信じていたが、それは、やがて、神の加護 (Wahyu) によって達せられ、彼が、ニトゥダ Nytdah (Kidulingkali ring Nytdah) の村の南を流れる川の畔の寺院で祈りを捧げていた時に、赤いルビーのソカ・ミラー Soca Mirah を手に入れたのである。

また、彼の富は、更に、バドゥン (デンパサール Denpasar 周辺) 地方の闘鶏場のチャンピオンによってももたらされた。

彼、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・グデが何人の妻を持っていたかは定かでないが、彼には、三人の息子と一人の娘とがおり、そのうちの、タブ・パクルン・アナ・アグン・ニョマン・ジンプラン Tabe Pakulun Anak Agung Nyoman Jinbran は、ジェロ・ブルンバン Jro Blumbang に住み、タブ・パクルン・アナ・アグン・ワヤン・ヌサ Tabe Pakulun Anak Agung Wayan Nesa は、プリ・アニャールのサレン・タマンに住んでいた。

そして、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Made が世継ぎとなった。



写真 8 葬儀風景

プマドゥ・アングラー・クランビタンの4代目のタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデについて語るべきものは、そう多くはない。

彼は、結婚はしたのだが、ついに、子供を得ることが出来なかった。

彼は、タブ・パクルン・イダ・プトゥラ・メサティヤ Tabu Pakulun Ida Betra Mesatya と呼ばれ有名になったが、それは、彼が死んだ時、妻の一人が、火葬の火の中に飛び込んで死んだことに由来するのである。そして、この出来事以来、殉死のことをメサティヤと言うのである。

彼の妻であったメサティヤは、主人であるタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデに対し、大変忠実であり、

彼女が、火の中へ飛び込む前の日々の生の中であって、彼女は、常に、今は亡き主人のミイラとなった身体に寄り添っていることを望んでいた。

彼は、プトゥラ・メサティヤと呼ばれる唯一の人間と言える。確かに、彼は、唯一のタブ・パクルン・プマドゥ・アングラー・クランビタンであり、多くの人々によって敬慕された人物として知られるが、それは、彼が持っている権威とカリスマ性に基づくリーダーシップの故にである。

彼は、1780から1840年まで支配していた。

プマドゥ・アングラー・クランビタン5世であるタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・コダ Tabu Pakulun Sira Arya Ngurah Made Koda はプリ・アニャールに世継ぎがいなかったため、妻や子供達と共にプリ・アグン・クランビタンからやって来たのである。そして、後に、プマドゥ・アングラー・クランビタンの地位についた。



写真9 火葬風景



写真10 バトゥ・サラハン寺院

彼は、常にタバナン地方の全ての神聖な場所や寺院を参詣しており、ワンガヤ・グデ Wongaya Gede の村にある神聖なバトゥ・サラハン Batu Salahan 寺で素晴らしい幸運を得たのである。それは、1800年のことだった。

従って、それ以後、今日に至るまで、プリ・アニャールの一族にとって、この寺院は、特別のものであり、常に、そこへ行き、祈りを捧げているのである。

この点について、前稿（研究紀要34号）に記した如く、平成6年3月のオカ氏の行動の中で、3月23日（水）に、一族と共に同寺院へ出かけており、松原も同行している。

そして、世継ぎに、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・テュタ Tabe Pakulun Sira Arya Ngurah Made Cuta がなった。

プマドゥ・アングルラー・クランビタン Pemade Anglurah Kerambitan 6世のタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・マデ・テュタは、ラテン式アルファベットについては読み書き出来なかったが、バリ文字については読むことも書くことも出来た。

彼は、背が高く、強い個性の持ち主であり、非常に高い精神性を持っていたが、手工芸の名人でもあった。

彼は、9人の妻を持ち、第一夫人は、バリ語でパドミ Padmi と言われ、タバナン王国の王女であり、第二夫人は、バリ語でプラミ Perami と言い、ジェロ・アスマン・クランビタン Jro Aseman Kerambitan からのアナ・アグン・サグン・プトゥ・ライ Anak Agung Sagung

Putu Rai である。

そして、残りの7人は、バリ語でプナウィン Pendawing と言われるトゥワ・ソカ Twa Soka, トゥワ・ウキラン Twa Ukiran, トゥワ・ソマ Twa Soma, トゥワ・ベドゥタン Twa Bedetan, トゥワ・ダパ Twa Dapa, トゥワ・ラガ Twa Raga とトゥワ・ヌガヤ Twa Ngaya である。

妻達は、結婚の順に従って死んで行ったが、誰一人として、彼に、子供をもたらさなかった。だが、トゥワ・ウキランが、一度だけ妊娠をしたが、不運にも流産してしまった。

彼は、息子を持つことなく、克蘭ビタンのプマドゥ・アングルラーとしての地位を保有し続けたが、実家であるプリ・アグン・克蘭ビタンのパクルン・アナ・アグン・ヌグラ・ニョマンの Pakulun Anak Agung Ngurak Nyoman の息子で、甥のタブ・パクルン・アナ・アグン・ヌグラ・グデ Tabu Pakulun Anak Agung Ngurah Gede を世継ぎとして指名した。

先に説明した如く、プマドゥ・アングルラー・克蘭ビタンであるタブ・パクルン・シラ・アリア・ヌグラ・マデ・テュタは、高い精神性を持っていた。彼は、精霊達のことを良く知っており、交歓することが出来た。そして、精霊達が、時々、普通の人間の眼でも見る事が出来るような姿を見せると信じていた。

彼は、友である精霊達に敬意を表すために盛大な饗宴を催した。饗宴は、通常、プリのバーレ・ブンゴン Bale Bengong で取り行われた。饗宴の間中、あらゆる種類の食器が準備されると共に、大きな舞台が設けられ、このような饗宴の舞台の人数は33人を数えるのである。そして、友である精霊達との意味深長な議論がなされるのが常であった。

そして、饗宴の間、彼は、友である精霊達と非常に素晴らしい会話を持っていたのだが、普通の人々には、彼が話しているところの精霊達の姿は見えなかったと言われているのである。

その時以来、饗宴は毎スクロ・ポン Sukro Pon, 即ち、ワンガヤにあるバトゥ・サラハン寺院の神聖な啓示がなされた日に行われるようになったのである。

友であるその精霊については面白い話がある。それは、ある時、タバナンのプリ・ダンギン Puri Dangin で大きな祝宴があったのであるが、その際、その祝宴の準備をしていた料理人達が、突然、消えてしまったと言うことである。

そこで、タバナンのプリ・ダンギンの王族の人々は、消えた料理人を連れ戻すために、タブ・パクルン・プマドゥ・アングルラー・克蘭ビタンに懇願したのである。

そこで、彼は、供物を供え、数秒間、精神を統一した。すると、ある日、奇跡は起り、消えていた全ての料理人が、元の宮殿に戻ったのである。

そして、それは、普通の人には、飾り帯をつけた沢山の人々がプリ・ダンギン・タバナン



写真11 饗宴のメイン・ディッシュ, バビグリン〈小豚の丸焼き〉



写真11 饗宴のメイン・ディッシュ, バビグリン〈小豚の丸焼き〉

へ料理人達を連れて行くのが見えるだけであった。

タブ・パクルン・プマドゥ・アングラー・クランビタン6世は寛大な人だった。

1917年に起ったクラカタウ火山の爆発による地震によって崩れたプリの壁の修理に際して、彼は莫大な金額の金を使い、労働者であるプリの周辺の人々に沢山の賃金を支払ったため、人々は一生懸命働き、そのために、修理は非常に早く終わった。

彼は、生涯の間、プリ・アニャール・クランビタンの人々によって尊崇されていた。バトゥ・サラハンの寺院をしばしば訪れ、そこで祈りを捧げるのが常であった。

パドミの妻が死んだ後、彼は、心を閉ざし、他の人々と会おうとはしなかった。

パドミの妻は、黒魔術によって死んだのである。そして、ジェロ・トゥガルの一族が告発された。そこで、タバナンの王は、告発された一族の者を処刑した。

タブ・パクルン・シラ・アリア・ヌグラ・マデ・テュタは重い病気にかかり、1920年に死んだ。

彼のプラミの妻のプトゥ・ライ A. A. Sg. Putu Rai は、彼の土地（田圃、乾いた土地等々）の唯一の正当な継承者となった。彼の残した相続財産の総計は、300ヘクタールだったと評価された。

その後、故タブ・パクルン・シラ・アリア・ヌグラ・マデの後継者として、誰がプマドゥ・アングラー・クランビタン7世になるかと言うことが大問題となった。

第一の候補であった、プリ・アグン・クランビタンのアナ・アグン・ヌグラ・ニョマンの息子が突然、深刻な病気で死んで以来、王室の候補者指名には長い年月が必要だった。

アナ・アグン・ヌグラ・ニョマンには、二人の息子がいたのだが、二番目の息子は、同様に広い土地を持っていたプリ・ジャンベのためと考えられていた。

従って、従来から、同家の役割だったプリ・アグン・クランビタンからの後継者指名の該当者はいなくなってしまった。

上記のような事情により、タバナンの王は、プリ・アニャール・クランビタンのために、後継候補の指名をしようとしたのだが、王が決定をする前に、プリ・アニャール・クランビタンの一族は、同家のために一人の候補者を指名したのであった。それは、プリ・アグン・クランビタンのアナ・アグン・ヌグラ・ニョマンの二番目の息子であるアナ・アグン・ヌグラ・グデであった。

タブ・パクルン・アナ・アグン・ヌグラ・グデがプリ・アニャールの領主の位についたのである。

そして、彼は、プリ・アニャール・クランビタンのプマドゥ・アングラー・クランビタン7世となったのである。彼は、即位する前に、既に、一人の妻と一人の息子を持っており、そのため、彼は、家族をプリ・アニャール・クランビタンへ伴って来たのである。

彼、タブ・パクルン・アナ・アグン・ヌグラ・グデは、故プマドゥ・アングルラー7世（6世？オカ氏の資料にはVIIと書いてある）のために盛大なる儀式を催した。

プマドゥ・アングルラー・クランビタン7世であるタブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデは、1890年に生まれる。

彼は、バリ語もラティン・アルファベットも同じ様に、読むことも書くことも出来た。

プマドゥ・アングルラー・クランビタン7世として、彼がプリ・アニャール・クランビタンで位に就いた後、彼は、ただちに、オジである故プマドゥ・アングルラー・クランビタン6世のための火葬の儀式を如何に取り行うかについての重要かつ厳粛な役割を担うことになったのである。

彼は、バラ・マンカ Bala Manca やジェロの家族を手伝わせ、更には、高僧の最終判断の助けを借りて、火葬の儀式の当日までの1年間、プリ・アニャール・クランビタンにおいて、ミイラ化した遺体を安置していたのである。

彼は、聖なる墓地へそれが運ばれるための道が完成するまでの間、火葬の儀式のための非常に大きく、高い塔を作り準備をしていた。

そして、その塔は、その後も、そのような大きなものがクランビタンで作られることはなく、この話は、今日に至るまで人々に語り継がれているのである。

このことは、従って、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデが、彼自身、カリスマ性を持っていたことを如実に物語るものである。その上、彼は、病気や財産を失って困っている多くの人々を助けることが出来たパラノルマル Paranormal としても知られている。

そして、また、彼は、椰子の葉であるロンタール Lontar に書かれた伝統的な薬剤であるウサダ Usada についても造詣が深かった。そのため、彼は、自分の子供達が病気になった時には、常に、ウサダに則った伝統的な薬を与えていた。

そのため、沢山の人々が、彼の所に来ては、病気や失せ物についての相談にのってもらっていたのである。

一方、彼は、椰子の葉のロンタールに書かれた伝統的なルールに則って行われる闘鶏を非常に好んだ領主としても良く知られている。そして、彼が闘鶏を行った所は、プリ・アニャールの第3区画であるタンダカン Tandakan に建設された。柱その他全てが金色に装飾されたグドン・トゥグ Gedong Tegeh として知られた新しい屋敷が完成するまで、常に勝ち続けたのである。

彼の領地で起った最も大きな失せ物は、バロン・ダンス Balong Dance の組織に属したものであったが、タブ・パクルン・シラ・アリヤ・ヌグラ・グデである彼の助言によってその失せ物は立ちどころに見つかったのである。

彼は、また、伝統的な薬剤と近代的な薬とを混ぜ合わせ、新たな効果が得られることを試

みたのであるが、それは、常に、失敗に終わってしまったのである。だが、彼は、いずれかの日には、そうした伝統的な薬劑が、必ず、役に立つと信じていた。

併せて、彼は、古来伝わる自己防衛のためのパンチャ・シラ Pencah Silat の技を身につけていたと共に、素晴らしいダンスの踊り手でもあった。そして、彼は、自分の子供達にとつての最高の踊りの教師であった。

彼は、4人の妻を持っていたが、そのうちの2人は、王族からのプラミであり、他の2人は、地位の低い階級の妻であった。そして、彼は、それらの妻達との間に5人の息子と6人の娘の11人の子供が居り、そのうちの2人は双子の兄弟であった。

プリ・アニャール・クランビタンでは、現在は、もっと沢山の一族が住んでいる。

そして、今や、プリ・アニャール・クランビタンでは、自由のための革命や、農地解放、若者世代の台頭、そして、インドネシアにおける共産党によるクーデター等による、社会の変化に伴う、新しく、近代的な生活様式の登場に伴って、非常に多くの難しい問題が、招来されたのである。

だが、彼は、こうした時代の変化にはついて行けなかった。それには、彼は、あまりにも年を取り過ぎていたからである。しかしながら、彼は、次世代についての非常に強固で基本的な感覚を持っていたのである。

即ち、「我らの力の統合と、衰退を分散させること」である。

彼は、全ての世代の者達に、力を結集することと、分裂を避けることを要求した。

1965年5月22日、彼は、75才を期に亡くなった。そして、6ヶ月の間、プリ・アニャール・クランビタンにおいてミイラとされ、1965年11月10日に火葬の儀が行なわれた。

農地解放は、プリ・アニャール・クランビタンにとっては未曾有の出来事となり、そのために、今日では、プリ・アニャール・クランビタンの土地は極く僅かなものになってしまった。

1983年1月14日、彼の息子であるアナ・アグン・ヌグラ・オカ・シラグナダ Anak Agung Ngurah Oka Siragunadha が、一族の全員から推されて一族の長となり、プマドゥ・アングルラー8世となった。

そして、プリ・アニャール・クランビタンは、今日、伝統あるクランビタンの土地における主立ちであるジュジュヌン Jejeneng として存在する5人の兄弟の力によるところが大きいのであるが、プリ・アニャール・クランビタンは現代的な生活スタイルを取るようになって来たのである。かつ、また、芸術、技術や文化の重要な担い手としての役割を担っているのである。

一方、プリ・アニャール・クランビタンの屋敷は、その構造の正真正銘さ（オリジナルさ）によって、当地を訪れる旅行者にとって非常に興味のある存在となっている。



写真13 オカ・シラグナダ氏

そして、プリ・アニヤール・クランビタンは、今や、現在の観光のプログラムに従い、その名は、海外にも及んでおり、世界の国々から数多くの観光客がここを訪れるのである。

アナ・アグン・ヌグラ・オカ・シラグナダは、個人的に、ミスター・オカと呼ばれることを好み、観光客の訪問のために、伝統に則った特別の催し物を創設し主催している。

彼は、1993年、公職である、バリ州政府の儀典長の職を退き、現在は、タバナンにおける非政府組織の観光機関であるプトリ Putri の委員長の職に就いている。

彼は、1人の娘と2人の息子の3人の子持ちである。そして、3人の孫を持っているが、長男のエラワンの所の孫の誕生を待ち望んでいる。2男のマニックは、現在、バリのデンパサルにある国立ウダヤナ大学の経済学部の学生である。

クランビタン1994年10月17日。

以上は、古いバリ語で書かれたバ・バ・ケラリヤン・タバナン Ba bad Kearyan Tabanan をアングラー・クランビタン8世によって翻案されたものである。

プマドゥ・アングラー・クランビタン8世オカ 署名



写真14 長男アデュス・エラワン氏の双子の娘とくつろぐ
オカ・シラグナダ氏とトッティ夫人



写真15 長男アデュス・エラワン氏とアニラ夫人の結婚写真



写真16 次男マニック氏と兄嫁アニラさん



写真17 長女マスさんと夫ウイアサ氏

付記 Note

若干の情報

伝統のある村であるクランビタンには、3つの館があり、これらはバリ語でプリと呼ばれており、これらのプリの下に15のジェロがあり、それらは、互いに親密な間柄を保っており、それぞれは、3つのプリの周辺に存在している。

ジェロは、プリより一段低い立場にあるのだが、それは、彼らの先祖の代において、その母親が、低位のカーストであるジャバヤスードラの出身の者達だったからである。

3つのプリは

プリ・アグン・クランビタンで約2ヘクタール半の広さを持つ。

プリ・アニャール・クランビタンは2ヘクタールである。

プリ・ジャンベ・クランビタンは1ヘクタール半である。

それぞれのプリは次の如き称号を持っている。

プリ・アグン・クランビタンは、アングルラー、あるいは、チョコレート

プリ・アニャール・クランビタンは、プマドゥ・アングルラー

プリ・ジャンベ・クランビタンは、プングリングシル Penglingsir

そして、

アングルラーは、クランビタン地域の王を意味している。

プマドゥは、アングルラーの副王あるいは、王の代理の意味である。

プングリングシルは、一族の長と言う意味である。

また、

タブ・パクルンは、殿下を意味している。

更に、

先祖の名前である、シラ・アリヤ・ヌグラは、バリの王制が消滅する以前の古い時代の称号である。

今日の名前あるいは称号は、アナ・アグン・ヌグラである。

そうして、

クランビタンのプリとジェロを併せた一族の人数は、約500～600人で、それらは、16世紀から21世紀へと続いているのである。

あとがき

前稿では、調査対象である、インドネシア共和国バリ州タバナン県クランビタン地区にある、プリ・アニャールの現状を現当主であるオカ・シラグナダ氏の行動記録と、同氏が主催

する観光客相手のパーティを中心に記述した。

そこでは、一族の長として、村人達への気遣いや、他の地域、特に、密接な関係にあるタバナンの王族との関係維持を始めとする、旧王族としての付き合いについて、また、先祖からの関わりの深い寺院への参拝等々、同氏の現在置かれている立場について考察を加えた。

第2次大戦後の農地解放によって、それまで保有していた田圃を主にした広大な土地と、そこに携わっていた農民を主とした領民達は、オカ家の支配を離れては行ったが、旧領主としてのオカ氏としては、彼らと、全く無関係と言うわけにはゆかない。

前稿で記した如く、平均3日に1回催される観光客相手のパーティにしても、そのパーティで働く、料理人、給仕、踊り子、楽器演奏者等々、彼らは、全て、近在に住む人々である。

旧領主として、オカ氏は、これらの人々に対するサービスを行うと共に、父祖の時代より伝わる伝統文化、特に、音楽や踊り等の芸能の保持および育成、それは、後の時代への継承を意味することであるが、こうしたものを守る役割を果している。そして、それは、同氏が、観光客相手のパーティを主催することによって、併せて、旧領民達の現金収入につながることもである。

こうした領民達へのサービスをすることによって、旧領主としての権威と役割を果していると言える。

だが、時代は大きく変化しており、これは、バリと言えども例外ではないだろう。リゾート地としてその名を世界に広め、観光をその主たる産業としているバリでは、世界の国々より色々な人が訪れると共に多様な価値観が流入し、人々が、好むと好まざるとに関わらず、また、意識する、しないに関わらず、物の考え方は変化するだろう。そして、それは、前稿で見た如く、バリの人々の心を大きく変化させ、既に、バリの人々の間にも、この変化を危惧している人達が多くいる。

このことは、今日、世界の国々、日本においても指摘を受けている経済至上主義的傾向によって、世の中が忙しくなると共に、古くから伝わっている伝統を次第に色褪せたものにしてしまうのである。この経済至上主義は、人々に物質的豊かさをもたらすはするが、その豊かさと共に、競争の原理が働き、人々は、この競争の原理に則り、忙しく働かなければならなくなる。

そして、これを行わなければ、競争社会から脱落することになるのである。

こうして、人々は忙しく生き、かつ、前へ前へと非常に速いスピードで進むことにのみ関心を向け、立止って周囲を眺め、時に、後を振り返り、自らが歩んでいる道筋を確認する暇がなくなっている。

これは、バリにおいても例外ではなさそうで、例えば、現代社会において世界的な現象の一つである、自動車事故、バリでもしばしばこれが起り、道路の要所に、事故で破壊された

自動車が展示されている様は、日本と変わらない。

この一事をとっても、「夢の島バリ」とか、「神々の住む島バリ」と言うキャッチ・フレーズが何時まで続くのだろうかと言う疑問を感じるのである。

古来、人と関わることの多い人間、または、民族は、多様な価値観に接するため、自ら保持していた固有のものを維持して行くことが難しいと言われて来た。ただ、だからと言って、他の価値観を取り入れ、新しい価値観を創って行くこと、それは、それでまた意義のあることであると言えるのかも知れないが。

観光を主たる産業としているバリでは、この当りのことがやがて大きな問題になって来るであろう。

そう言いながらも、今日、我々日本人がバリを訪れると、かつて、自分達が経験した30年前、40年前、はたまた、50年前を彷彿させられる光景を眼の当りにすることが出来る。

このことは、バリにおいても30年後、40年後には、現在の日本の状態と似たようなことになるのかも知れないと言う危惧を感じさせられるのである。

（続）

Research Note

The Sosial Climate and Lineage in Bali(II)

Sohei MORI

Masamichi MATSUBARA

This research-note is succeeding “The Social Climate and Lineage in Bali”.

Basing on translation of “History of the Royal Family of Pri Anyar Kerambitan 1875-1994”, written by Mr. Oka Silagunadah, we add thought to it through making interview and associate with him.

As a result, we have confidence to make it possible to grasp total imagination of Kerambitan and family line of Mr. Oka.

- 1) Kerambitan is a branch family of Tabanan-kingdom, flew on 1660's.
- 2) The ancestor of Mr. Oka was a member of Tabanan-kingdom family, but he was a “regent person” coming from java. This pattern seems same with other royal family in Bali.
- 3) In 1968, Oka's family lost almost all land of theirs owing to Revolution of Indonesian Agirculture following its independence. Now Mr. Oka is a councillor of Bali-state and keeps festival and praying of Kerambitan village. He faces many problems of generation gap and modernization in present Bali.